

## ゴレ島におけるダークツーリズムの実情

十文字 樹\*

ゴレ島行きの船を待っていると、隣の椅子には赤と黄のカラフルな布をいじる50代くらいの女性がいた。目が合ったので話をするとゴレ島で土産物屋を開いているらしい。「島でこういう服を売ってるから、ぜひ来てね。」これから待ち受けるであろう恐怖体験を前に、私はその緊張をいくらか解きほぐされた。

### ゴレ島とダークツーリズムについて

私が向かったゴレ島は、アフリカ大陸最西端のセネガル共和国に位置し、首都ダカールの港から船で20分ほどのところにある小さい島である。1時間ほど歩いてまわれるゴレ島は、16～19世紀にわたって黒人奴隷貿易の拠点として使われていた [Maillat 2018]。この島の見どころは「奴隷の家」と呼ばれる黒人奴隷の収容施設であり、現在でもその建物を見物することができる。このような歴史的経緯からゴレ島は世界遺産として認定されており、旧宗主国であったフランスをはじめ、ヨーロッパやアメリカなどから観光客がやってくる。

観光研究では、死や災害など負の遺産に対する関心から誕生した観光を「ダークツーリズム」と呼ぶ [Foley and Lennon 1996]。日



写真1 船から見るゴレ島

本では広島原爆ドームなどの戦争関連の施設や、自然災害の痕跡がダークツーリズムの場として有名である [親泊 2012: 140]。このようなダークツーリズムは、悲しさの継承だけではなく歴史的な学習の機会を提供する。また、観光地における「ゲスト」の発言から「ホスト」のアイデンティティが創造されるなど、観光活動は大きな社会的影響力をもっている [太田 1993]。そのため歴史的背景から生まれるダークツーリズムはホスト・ゲストの両者の文化に対して重大な影響を与えられられる。

したがって、ゴレ島は黒人奴隷貿易の拠点だったことからダークツーリズムの観光地とみなすことができ、歴史の学習はもちろん、辛く悲しい過去を語る「ホスト」の役割やその文化形成を観察することで、ダークツーリズムと社会関係について新たな知見を得るこ

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

とができるかと推測した。

しかし、緊張したまま船に乗り込んだ私は、これから待ち受けるであろう恐怖とはちぐはぐな光景を見ることになった。熱い接吻を交わす若いカップル、島の解説の交渉をもちかけるガイドたち。歴史的なダークツーリズムの観光地とはいいながら、「ダーク」一辺倒ではないのではと思わせられた。

### ゴレ島の「ブローカー」

ゴレ島に着き、観光庁の男性から「ベストガイド」と紹介された男性と落ち合うとさっそく「奴隸の家」へ向かった。そこには既に観光客が集まっており、神妙な面持ちでメモを取る人もいた。「ようこそゴレ島へ。ここが、奴隸たちを収容していた『奴隸の家』です。」それまでの会話と語調を変え、ガイドが解説を始めた。6畳ほどの小部屋に10人以上の男性が収容されていたこと、2階で生活する「白人」が夜になると若い女性を「品定め」していたこと。このほかにもさまざまな凄惨な歴史を丁寧に話してくれた。しかし、その語りは淡々としていた。私がしばらく眺めていると、ガイドがもうひとりの観光客を連れ、再度解説をした。「ようこそゴレ島へ。ここが、奴隸たちを収容していた『奴隸の家』です。」一言一句違わぬ解説は、遊園地のアトラクションを思わせた。

その後ガイドに先導され島内を歩くと、売店へ案内された。売店といってもひとつではなく、幅1メートルほど、高さ2メートルほどの柵をひとりの女性が切り盛りする売店が20ほど密集する売店群であった。私が到

着すると店員である女性20人が次から次へと商品を見せ、安くするから来いと腕を力強く引っ張った。私が値下げ交渉している間、ガイドは顔見知りの店員たちに商売の調子を尋ねていた。

売店から離れ、40分ほど歩いたものの、私が期待するような語り部はおらず、予想していた想像を絶する恐怖も「奴隸の家」を除いて聞くことはなかった。ガイドに料金を渡し、別れを告げるとガイドはこう切り出した。「ゴレ島の外でも、観光で助けが必要ななら連絡してください。」男性はゴレ島に限らず、セネガル他地域の観光地の案内も生業としていた。この日も車で6時間ほどかけて次の観光地へと向かうことになっていたらしい。男性はチップを受けるとそそくさと船に乗ってしまった。

ゴレ島の観光を支える人々は現地住民の「ホスト」ではなく、島外からの「ブローカー」であった。彼らにとってゴレ島は、悲しみの場以上にビジネスの場であった。

### ゴレ島のゲスト

歴史を知ることができるスポットは「奴隸の家」に限られない。例として砲台が挙げら



写真2 客のいない歴史博物館

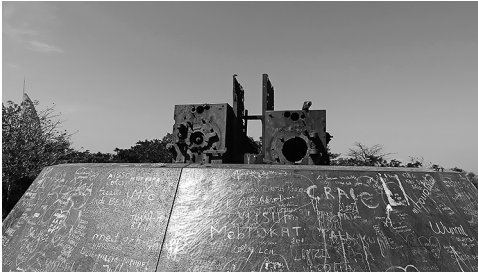


写真3 落書きで埋め尽くされた砲台

れる。これは、ゴレ島が要塞としての機能を有していた際の遺物であり、直接触れることもできる。しかし今ではその表面がハート形や名前など、観光客による落書きで埋め尽くされている。このほかにも、歴史博物館やネルソン・マンデラが涙した高台が挙げられるが、そちらでは船上で見かけた観光客を見かけることはほぼなかった。どうやら「ゲスト」は歴史の学習以外にも目的があるらしい。

ぬぐい切れない違和感を抱えたまま波止場へ向かうと、美しい浜と海が広がっていた。そこには整備されたビーチがあり、椅子やパラソルも用意されていた。その近くには、ピザやパスタなどを楽しめるレストランもあり、そこでようやく観光客たちを見つけることができた。レストランは満席になり、ビーチでは水着姿で日光浴を楽しむ観光客もいた。

私がゴレ島に求めていた価値は凄惨な過去を学ぶことであった。しかし「ゲスト」はそれ以外にも価値を見出ししており、「ブローカー」もまたその要求を満たすことで利益を得ていた。私が想定していたものとは、大きく異なった「ダークツーリズム」がゴレ島にはあった。

### ゴレ島のダークツーリズムの形

ゴレ島は確かに凄惨な歴史の舞台であった。アフリカのさまざまな地域から集められた奴隷たちは、二度と生誕の地を踏むことなくここから船に乗せられていった。しかし、それは2世紀前の話であり当時を経験した人はいない。

現在のゴレ島はその歴史を認めつつ、その歴史に限られない観光を開発していた。「ブローカー」であるガイドは歴史を伝える役割を負い、それを終えると「ゲスト」を別の「ブローカー」たちに渡した。「ゲスト」は「奴隷の家」で歴史を受け止め、その後は美しい風景とバカンスを楽しみ、歴史を感じる一方でポジティブな思い出もつくっていた。そして現在を生きる「ホスト」は「ゲスト」との接触はなく、「ゲスト」が通らないエリアで生活をしている。

ダークツーリズムは悲しい過去を追体験し、手を合わせるだけがそのすべてではないようだ。現在を生きる人々に利潤を与え、思い出づくりの機会を提供しうる。ゴレ島は私が抱いていたダークツーリズムの枠組みを打ち崩し、社会関係の新しい切り口を見せてくれた。

現在のゴレ島の姿は、凄惨な過去とともにその乗り越え方を伝えているのかもしれない。

### 引用文献

- Foley, M. and J. Lennon. 1996. JFK and Dark Tourism: A Fascination with Assassination, *International Journal of Heritage Studies* 2(4): 198-211.
- Maillat, M. 2018. *Gorée au fil du temps Gorée*

*Phoenix des Tropiques*. Dakar: Association des Amis du Musée Historique du Sénégal (Gorée).  
太田好信. 1993. 「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研

究』57(4): 383-410.  
親泊素子. 2012. 「Dark Tourism 試論『負の遺産は観光資源になり得るか?』」『江戸川大学紀要』22: 139-148.

---

## イエティをめぐる複数の語り

石内良季\*

### ブータンのイエティ譚

「あれはちょうど私が生まれてから干支が2周した(24歳)くらいの頃、インドとの国境につながる道路の建設をしていた時さ。<sup>1)</sup> 道路を作るために集めていた水が雄のイエティに毎晩飲み干されるもんだから、ある日代わりにアラ<sup>2)</sup>を入れておいたの。それを飲み干して、酔いつぶれたイエティを私たちは捕まえて、インドに連れていった。それから2日後、木の根でできた抱っこ紐を使ってソナムという名の赤ちゃんを抱えた雌のイエティが建設現場にやってきて、“ソナムのお父さんはどこ?”と叫んでいたよ。」

2020年1月某日、私はブータン王国(以下ブータンと称す)東部タシガン県のある村で、アビ<sup>3)</sup>(90代、女性)の話に耳を傾けて

いた。ブータンの土着信仰と自然観の関係について「聖なる森(sacred grove)」の調査を進めていた私は、調査を始めて早々に新たな森の住人の存在を知ることになった。そう、イエティである。

一般にヒマラヤの雪男として知られるイエティ<sup>4)</sup>は、ミゲ(*migoi*)やグレッドポ(*gredpo*)、グレットム(*gretmu*)という名でブータンでは知られている(筆者の調査地ではグレットムが用いられていたが、本稿では広く一般に知られているイエティの呼称を用いる)。ブータンのイエティ譚をいくつか紐解くと、その大きさはおよそヤク<sup>5)</sup>1.5~2頭分であり、顔を除き全身を覆う体毛は赤茶色から黒色、雌は大きな乳房を垂らし、標高およそ3,500m~5,000mの間に生息、単

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

- 1) 現在のアビの年齢と当時のブータンの道路開発状況(1961年より始まった第1次五ヵ年計画により施行)を考えると、アビの示す年代には誤差があるように思える。
- 2) ブータンの家庭で作られる蒸留酒。
- 3) 現地語(シャルチョップ語)で“祖母、おばあさん”を意味する。
- 4) イエティという呼称は元々、ネパールのシェルバ族の言葉に由来し[Snellgrove 1995: 214]、それが西欧の探検家やメディアを通して一般化したものである。
- 5) 体が長毛で覆われたウシ科の哺乳類。雄は体長3mを超えるものもある。